

十島村教育委員会だより 令和4年5月号

変わりがたカラ情報

南北160km
「心をつなぎ 気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822
鹿児島市泉町13番13号
TEL 099-227-9771



報訪之瀨島小・中学校「感謝」を込めて

限界をつくらず、可能性を広げていきましょう!

十島村教育長 木戸 浩

新年度がスタートして2か月が過ぎようとしています。新しい環境に身を置いた人も多いと思います。新しい学年、新しい学校、新しい先生等……。緊張感もあふれています。大型連休も過ぎ、新しいことと安心感も少し落ちてきて、緊張も解けてくるのが、この時期です。いわゆる「五月病」という気持ちがあるのではないのでしょうか? 「3日、3週間、3か月、3年…」という気持ちは、油断が起きている区切りだそう。気のゆるみから失敗や怪我、事故等が起こる時期だといわれています。

「できそうにありません、無理です。」昔、私もよく言っていたこの言葉は「これ以上努力をしません。」という宣言に等しいと、あることをきっかけに思うようになりました。人は、子どもでも大人でも、努力したくない、面倒くさい、負荷のかかるのは嫌だ、そう考えた時に「できそうにない(できない)」と言ってしまいがちです。そう考えることで、その先の努力を求められることもなく、自らに負荷を課さなくてよいので、状況によっては都合のいい言い訳にもなるからです。

「小さな『できる』の積み重ね」

脳科学の研究が進む中で、こんなことも分かってきました。脳が、いろいろな場面で「私には不可能だ。」と反応することに慣れてしまうと、以後、あらゆることに取り組もうとしなくなる傾向が強くなるのです。これとは逆の作用ももちろんあるようです。「Aを〇月〇日までに仕上げる(提出する)のは、困難かもしれない……。Aの問題を解くのは難しいな……。しかし、とにかくやってみよう……。できた。AができたのだからBもできるかもしれない。あっ、できた。Bができた自分は、Cもできるかもしれない。」というプラス思考の連続こそが、質の高いパフォーマンスを生み出し、可能性を更に広げていくことにつながっていくのです。ここに人間の成長の本質がありそうです。

「信じて続ければ、必ず「力」に～ 確かな一歩の積み重ねでしか、遠くへは行けない(イチローの弁)～」

ある年の4月、校長をしていた時に全校朝会で「続ければ力」という話をしました。それを機に登校後の自主ランニングを呼びかけたところ、いつの間にか教師も加わり、朝の定番活動になってしまったのです。12月の持久走大会では、しばらく更新されていなかった新記録が4つも誕生しました。走ることが苦手だった子どもが、友達を誘って毎朝こつこつ走り続けている姿が何とも健気でした。



基礎体力とあわせて精神面の強さも様々な面で少しずつ現れ始めたのです。その先の成長が、予測できないほどです。

ある学校では、島を1周する一輪車大会が、毎年開催されます。また、一輪車の集団演技を運動会で発表する学校もあります。その他にもエイサーや太鼓、楽器演奏など、どの学校にも独自の取組があります。山海留学生や先生の子どもの手で初めて十島村の学校に来た子どもの中には、入って来た学校の伝統種目に全く初めての出会いの子どももいます。しかし、数か月後には一輪車であれば全員が乗れるようになります。島一周をなんなくこなせるようになります。他の演奏や踊りにしても同様です。「継続は力なり」です。練習は裏切りません。

自分自身の「ナンバーワン」と、十島村全体を通しての「ナンバーワン」を目指して、一人一人の得意分野を伸ばし、限界をつくらず、可能性を広げてほしいと願っています。

親子で届けるカーネーションの気持ち



今年も「母の日」に向けて、田知行さんが、十島と三島の子どもたちにカーネーションをくださいました。そして、島の子どもたちは、「おかあさん、いつもありがとう」という気持ちを込めて、母親や寮母さんそして里親さんにカーネーションを贈っています。

今年もいただいたカーネーションの画像を、遠くにお母さんにメールで送った山海留学生がいたという話を聞いています。カーネーションを2世代にわたって届けた親子もいたなど、40年以上毎年届けてくださっている田知行さんの功績に改めて感謝をすることでした。



寮監さんに感謝(口之島)



(平島南之浜港で)



里親さんに贈呈(小宝島)



寮監さんに贈呈(悉石島)

【新聞に投稿】

本はおもしろい
頭がよくなる
風にゆられて
次のページへ
いつでもどこでも
本のせいかいへ
わたしの本
だれにもわたさない
大切な本
またあした
今たびに出る
(宝島小二年 廣瀬 みのり)
令和四年三月 転出



子どものうた
四月二十四日 南日本新聞掲載

十島村で学ぶ

中之島中学校 3年 小原澤 そら

「中之島、十島村で育ち、感じたこと」

私は中之島、十島村が大好きです。私は茨城で生まれ、約8年前、中之島に引っ越してきました。初めは「友達ができるかな」「怖い人がいたらどうしよう。」など、不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、島に着いたとき、皆さんが笑顔で、優しく話しかけてくださったので、とてもほっとしたのを覚えています。それまで緊張して紫色に見えていた世界が、一気にピンク色に変わったような気がしました。休日には、学校の先輩や友達が家に遊びに来てくれたり、地域の方々から、たけのこや伊勢エビ、ケーキなどのお裾分けをもらったりします。とても楽しい日々です。今の元氣な私があるのは、家族はもちろん、友達、島の皆さん、先生方のおかげだと思います。普段から「大きくなったね。」「お姉さんになったね。」と声を掛けてもらえることは、私の心の支えになっています。

私はどうして中学3年生になりました。高校進学のため、中之島、十島村を卒業しなければならぬと思うと、とても寂しいです。そのため、大運動会や、校区文化祭では、制限があったとしても、島の全員が楽しみ、喜んでいただけるよう、これまで以上に真剣に取り組むと思います。また、希望する高校へ進学できるように、日頃の勉強を大切にし、島の方々の応援に応えたいです。

中之島での最後の一年、やり残すことがないように楽しみます。



【報訪之瀨島小・中学校からのメッセージ】
教諭 渡邊 修宏

報訪之瀨島小・中学校に赴任して2年目になりました。島での勤務だけでなく、生活自体も初めてだった昨年度は、何もかもが後手に回る始末で、慌ただしく時間が過ぎて行ったように感じます。しかし、その中で、自分に足りない部分に気付かされる1年でもありました。まさに本校の学校教育目標にある「みがく」ためのチャンスがたくさんあったと思います。今年度は、そのチャンスを生かして一つでも多く返して、恩返ししていきたいと思ひ、毎日過ごしています。

報訪之瀨島に来て心地よく感じているのは、人とのつながりと温かさです。どこへ行っても大切なことではありますが、島での生活や教育には欠かせないことを改めて感じました。コロナ禍で十分な交流はできなかったのですが、子どもたちのよりよい成長と学校の発展には、島民の方々の支えなしには成り立ちません。たくさんの温かい目で子どもたちを見守っていただけていることを実感しています。近所の子どもを地域の大人で見守り、育てている様子を見て私が子どもだった頃のような懐かしさを感じます。子どもたちが、素直にのびのびと、安心して育っているのも納得です。子どもたちだけでなく、私にも温かく声をかけてくださる方も多く、来てよかったなど実感しています。早く報訪之瀨島の一員として認められるとともに、縁あってここへ来た教師として、島民の方々と子どもたちの力になりたいと思っています。そのために、自分にできることを見つけ、今できる力で精一杯取り組んでいきたいです。

『教職員仲間であるあなた』への 私からのメッセージ

それぞれのところで毎日頑張っておられる姿を励みに、情報を共有しながら、共に頑張っていきましょう。そして、子どもたちが笑って、夢中になり、楽しんで、行きたくなる「笑中楽行(しょうちゅうがっこう)」を目指しましょう。

令和4年4月18日 南日本新聞「若い目」掲載

「地域と交流 明るいあいさつから」
宝島中学校二年 眞嶋 友梨佳

昨年十一月、私は山海留学生として静岡から宝島にきました。最初は不安でいっぱいだった学校生活。今ではとても楽しく過ごすことができている。

そんな私が中学校に入学してから一番頑張ったことは「気持ちのよいあいさつをする事」でした。なぜなら、小学生の時は恥ずかしくて、あまりあいさつができていなかったと思ったからです。マスクをするようになってから、これまでに上を、大きな声ではっきり、相手の目を見て、しつこくすることを心がけてきました。意識して、しっかりとしたあいさつをすることで、コミュニケーションも増えてきました。それでこの一年間で、「相手も自分も気持ちのよいあいさつをする」という目標を達成できたと思います。これから初対面の人にも積極的に明るいあいさつをしていきたいと思ひます。



令和4年3月5日 南日本新聞「ひろば」掲載

「新聞でつながった」
宝島小学校 六年 松下 朔也

二月二十六日付の「若い目」で、「宝島から世界へ」という東京都の川嶋汐里さんの記事(三月号に掲載)を読みました。

ぼくが鹿児島市から宝島小学校へ山海留学生としてやってくるのは、川嶋さんと同じ四年生です。それ川嶋さんが書いていたように、ご質問はぼくも気になっていました。海岸に行くのが流石にたくさんのペットボトルや生活用品などが流れてきています。

これまでも島でできることは続けてきました。子ども会活動の海岸清掃は自治体の方々が協力してくれました。しかし、ぼくたちができることに限りがあります。島でできるごみ対策の課題はまだありそうです。

併設の宝島中学校に進みます。「若い目」で川嶋さんとつながることができたのをきっかけに、中学校でも宝島の環境対策について考えていきたいと思ひます。(現在、宝島中学校一年)

